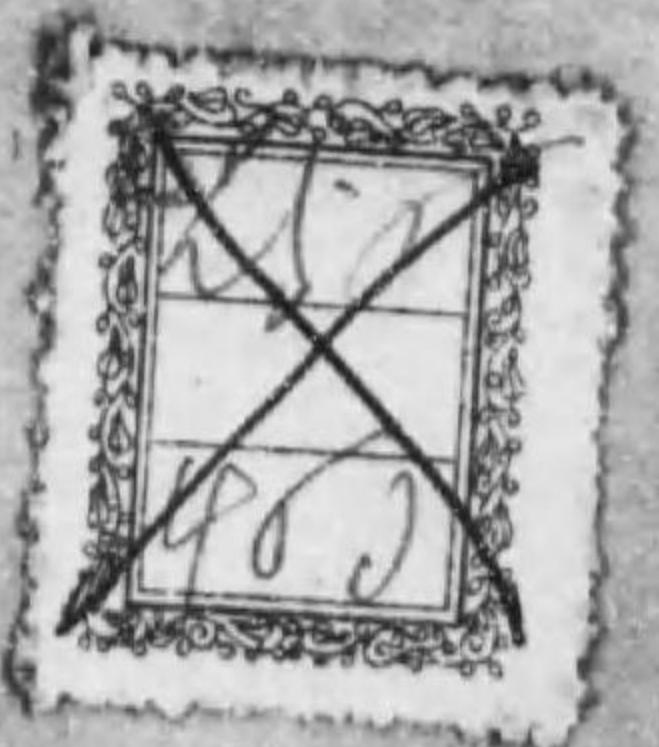


特113

889



9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



4月13
889

藤

戸

内之部卷之ハノ五

役	別	束	附
シテ			
後シテ			
ワキ	浦の男の母		
ツレ	浦の亡の靈男		
從人	三佐々木盛綱		
人	刀 扇		
	梨子打烏帽子	襷 黒頭 同帶 着附無地熨斗目 寄水衣 腰帶 腰袋	
	白鉢巻		
	着附厚板		
	込大口 直垂上下 少		
目番四	類別	島兒國前備	所
月			季



解

説

藤戸二

ワキ、同ツレ二人を出で、舞臺に入り向ひ語る。

一聲にてシテ出で、舞臺に入り、常坐にて留め語る。

『老の波越えて藤戸の明暮に』 此處は引立て語るべし。

名宣、道行同断。着キ済みワキ坐に行き床几、ワキツレは其次に下に居る。

『ふしぎやな是成女の訴訟有り顔に』 此處はシテへかゝり語る。

『御前に参りて侍ふなり』 此處にてシテ、中に出で下に居る。

『あ、音高し何とく』 此詞もシテへかゝり語る。

『いつ迄とてか忍ぶ山』 初回はしつとりとつけて語る。

『住み果てぬ此世は假の宿なるに』 此處少し氣を變へ語るべし。

ワキの語り、心持、緩急種々あれども口傳。語り後の懸合亦口傳なり。

『悪事千里をゆけども』 此地はかゝつて語るべし。以下緩急多し、同じく口傳。

クセ留メ、ワキのセリフ済み、シテ中入。間済み待語、待語果て、

後シテ、一聲にて杖つき出で舞臺に入り常坐にて留め語る。

『うしや思ひ出でじ忘れんと思ふ心こそ』 此處は納めて語るべし。

ワキ
枝
キ裏
『ふしぎやなはや明方の水上より』 此處はシテへかゝり語るべし。以下懸合宜しくありて
此地はハツキリ語る。以下シテに種々の形あり、緩急、心持等も多けれ
ば寫と見計ひ語るべきなり。

地十
枝
キ裏

『思ひの外に一命を』 此地はハツキリ語る。以下シテに種々の形あり、緩急、心持等も多けれ
ば寫と見計ひ語るべきなり。

地九
枝
キ裏

藤

第三
生れみあゆ行ますやくの戸
乃渡りよし見せハ傳メス乃
三郎威徳アシヒ。おもじ度々森戸
れどもは仕事一其の恩賞アハ前
の児鴻を教へて言ひまく

いわゆるの部屋や秋浦湯乃
温泉あるゆゆくわくわく風
長岡にてやまもとたけいはまえ
道ばびら者下りやくもく葉
老の波難てり無
戸の羽扇扇ひ甚乃うきうき

宿
すみやまく山廬の竹館あり
まよ草と山廬の山はあ
事うするぞ まよ草と山廬の
アリ室あれどおとおとおとおと
まよ草と山廬の山はあ
周囲あれどおとおとおとおと
周囲あれどおとおとおとおと

人乃花村ハ皆難可と云ひ
我子がまも御身をも御身をも
トも深の底にあがめ難くは
情ある事つゝ便る事か若
ばつる事かとばかり何と
秋は生は候る恨むるに

人乃花村 甫
ねあみ秋子を傳へ院
めびき 事ひ 伴
ひ 事ひ 事ひ 事ひ
あよねか人 ひ ひ
かかづけに其の模様り
て。海を昇りてはさむ。おれ
舟を出立してはさむ。

がれにましゆく。ひはまで
とて、うすくみゆく。ゆくあをま
人きむおも草をまげむ物をほ
と傳す。かのじやに黒雲の絶無
儀の空あく。我ウ。観るままで
なまやく。まぼうよしもままで

がれにましゆく。ひはまで
とて、うすくみゆく。ゆくあをま
人きむおも草をまげむ物をほ
と傳す。かのじやに黒雲の絶無
儀の空あく。我ウ。観るままで
なまやく。まぼうよしもままで
語同ひ。うゑを便あく事続りよ
まつたる事續りよ

ありて聞く。おもむき事、二月廿
五日のおまつりにて、浦の男と、
ちづきの女浦を馬とて渡るを、
而やかとて書か。後者中、多
ばく、推行の様ある。不乃い。月が
ふらまつて有り。月のまづら西

「あくと申す即ハ情も無ひ。爲めに告
とす。家のみわざとす。ゆくは
彼等とて人をもばく通う。或
より、ゆきゆきゆきゆき。がりやく下
萬々能くまき翁うて。よきやくて
縁くとて。不便まくお。かまく

・まことに言ひづかう。と傳海は沈
めく歸り。お根の海。さすがにうら
きよよし。何事。まつた。乃
事。と。思ふが。恨を。まつて。まく
あひ。秋子を。浦の沈め。根の。甚而
ハ。海が。かの。根の。まく。まく。
下

刀。も。は。う。紀。河。の。ま。る。が。か。れ
水。の。か。れ。に。流。散。ま。ほ。か。
下。ぬ。る。人。乃。使。く。も。ゆ。き。か。く。じ。う。
き。あ。ゆ。ほ。く。う。と。タ。使。め。よ。
れ。事。ま。く。有。し。能。く。人。を。も。と。
男。か。に。下。頃。く。隱。れ。か。れ。終。と。

アハカタシと思ふ。お事門を
出でて、まことにほりゆきだる。よ
まざまをきぬ親あらへ。おもてま
らさう。さはう。何乃破ぞ。あら
むれめが、圓ようじながのふと風
よき道よ遠く。かねお社より御参られ

アキナリ。字ああき。父のぼうわまれ
あつり。父か不まちかわい。あつ
あ。若よみゆき。みゆき。若
瀬の波。みゆき。あやや。瀬か
に。みゆき。あやや。瀬か
かみかうすかうす。瀬か
かみかうすかうす。瀬か

待たまひあひよつてうらやまき
す、重きやまくまくわざと
け、それ様もくわくわくほん
かは、夢みたまくまく
お露きがまくまく、さうがいもく
はうすくまくまく、まくまく

の、圓く道く物てたまきを給く
ぐもあくはむまくじ我まくさ
さむくかと現あむくむむとく
きやく、^情、まくくくくくく
かくまく事まくわざと被され称
まくまくまくまくまくまくまく

かくすかくと秋屋のゆかよ酒の
あふく後者と私室の事。おまけに
お弟の法が毛をうなぐ。お母様
乃よもとが眞まうねるいわ般
着物のみのおひづく。其とばかりを
そくは乃がと新め毛をよ。不思

有情。無害。三界不障。惡魔。

アヤシム上
アヤシム山。アヤシム山。アヤシム山。
めうり。アヤシムあれ。アヤシム。アヤシム。
アヤシム。アヤシム。アヤシム。アヤシム。
アヤシム。アヤシム。アヤシム。アヤシム。
料もアヤシム。アヤシム。アヤシム。

居
居る事無く又月日其のあすゆく浦
浪乃山蘇アシテテアリテテアリテ
波也其の黒毛乃平川の様
あはるの氣を御傳す後
あはる
乃すか岸者よりかうりてま

踏みぬか里食バニミタガヨマケ
ナリモヤもナモヤ明方れやトマツ
ガジナ者ナヤタハ松キモガ
ヤクシムシトナシタの里トマツ
キリバシルノ有翁タレタ原
立ぬるをめ地キリヒ乃シ

馬ハまくと浦シマツをかうてゆ事シテ 布ヒアガハ
揚ハハタケをかうて 鳴ハハラタカを圓カクるおり
あらの浦シマツをかうて 鳴ハハラタカを圓カクるおり
岸
いひむ思シテ トシテ かよひて さる
乃ハハナムグリとアホウ事ハハマニシハタ
海シマツをかうて かよひて さる
海シマツをかうて かよひて さる

たゞあふ。かくうをもひぐてや。波シマツを
ちふ。き満ハラタカ乃ハハナムグリとアホウ事ハハマニシハタ
つきて、紅水シマツをかうて、かよひて、さる
かく。波シマツをかうて、かよひて、さる
通ハシ。かくうをもひぐてや。波シマツを
いふ。浦シマツをかうて、かよひて、さる

わが事下事
かに折第
さうまく行はるゆき
おの出で
戸が水底の雲龍乃水井を
あつねをちんと思ひて

黒川のあは年少のはづ
ほゆるよむかすが
ほくまくすが
即ちおぢみぬ
ほくまくすが
みだりの海をや
さくらゆめの
ゆくが

得脱の身となりぬ事体が。す
とくありよき。

着任権有所

大正

五年四月

四日 印刷
九日發行

東京市深川區西平野町一番地

著作者 寶生九郎

東京市日本橋區通四丁目八番地

發行者 江島伊兵衛

東京市日本橋區通四丁目八番地

發行所 榊屋謡曲書肆

東京市神田區皆川町二番地

印刷者 田村茂太郎



終

